

島根・天神遺跡^{てんじん}

1 所在地 島根県出雲市塩冶有原町

2 調査期間 一九九四年(平6)五月一―一〇月

3 発掘機関 出雲市教育委員会

4 調査担当者 川上 聡・岸 道三

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 弥生時代中期中葉―近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

天神遺跡は出雲平野のほぼ中央に位置し、本調査はJR山陰本線高架建設に先立って行なわれた。調査は全長二七〇mにおいて実施

し、木簡が出土した地点はその北東端にあたる。

五点の木簡が出土したが、

遺構に伴うものではなく、

層的に見ると、中世末頃

の石敷遺構と近世の道路状

遺構の中間層から出土して

いる。石敷遺構も道として

使用され、それを踏襲して



近世道路が敷設されたと考えられ、石敷遺構の直上からは符と馬歯が出土している。

これらの状況から、木簡も中世末を上限とするものと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「<北□式升」

・「<□□□ようこうへ」 126×30×5 032

(2) ・「<□□□」

・「<□□□」 161×27×3 033

(3) ・「<□□□よけうへ」

・「<□□□よけうへ」 (127)×(15)×5 033

(4) ・「<□のみ□内くほ」

・「<みの三升」 121×28×4 032

(5) ・「<三升よけうへ」

・「<□□□よけ」 126×25×2 032

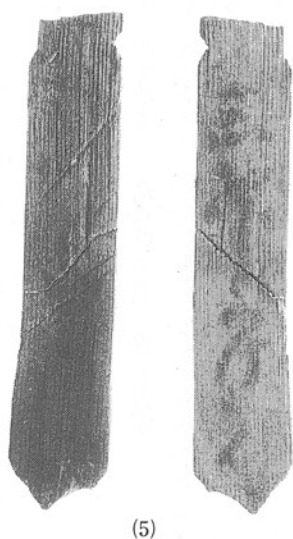
五点の木簡は、いずれも上端部側面に切り込みをもつことから、いわゆる付札木簡に類別することができる。墨書の記載内容は、いずれも簡略すぎるうえ、山陰地方でいまだに近世木簡の報告事例が

ほとんどないために、比較分析しうる資料がない。

具体的用途は現在のところ不明であるが、木簡に書かれた物品の容量と考えられる「三升」(4)(5)「式升」(1)のほかに、「よこうへ」(1)「よけうへ」(3)(5)の記載からは共通した用途で使用されたことがわかる。

これらのうち、(1)(4)の木簡は、法量がほぼ同じであるうえ、機能と直接関係しない上端、下端部のケズリや角欠きなどに類似点が多く、製作主体の親近性が窺われる。一方で、残る(2)(3)(5)の製作技法は(1)(4)とは異なり、またそれぞれが異なっている。

以上のように、五点の木簡は記載内容や付札という機能からみると一群の木簡とすることができ、製作技法については共通するものと異なるもののグループがあることが明らかになった。製作技法の異なることについては、下端に段を有する(2)のように、木簡の



(5)

機能・用途による差とすることもできるが、上端、下端のキリ・オリのケズリのあり方、(5)のカットグラス状ケズリにみられるように、木簡の二次の利用の問題も視野に入れながら、製作主体の差を考えるべきであろう。

なお、木簡の製作技法が検討されている古代とは異なり、近世木簡では台鉋などの工具による成型・調整も考えられるが、(1)(3)(5)には、ハギトリ状ケズリ・カットグラス状ケズリがみられ、古代の木簡同様、小型の刃物による調整が認められた。

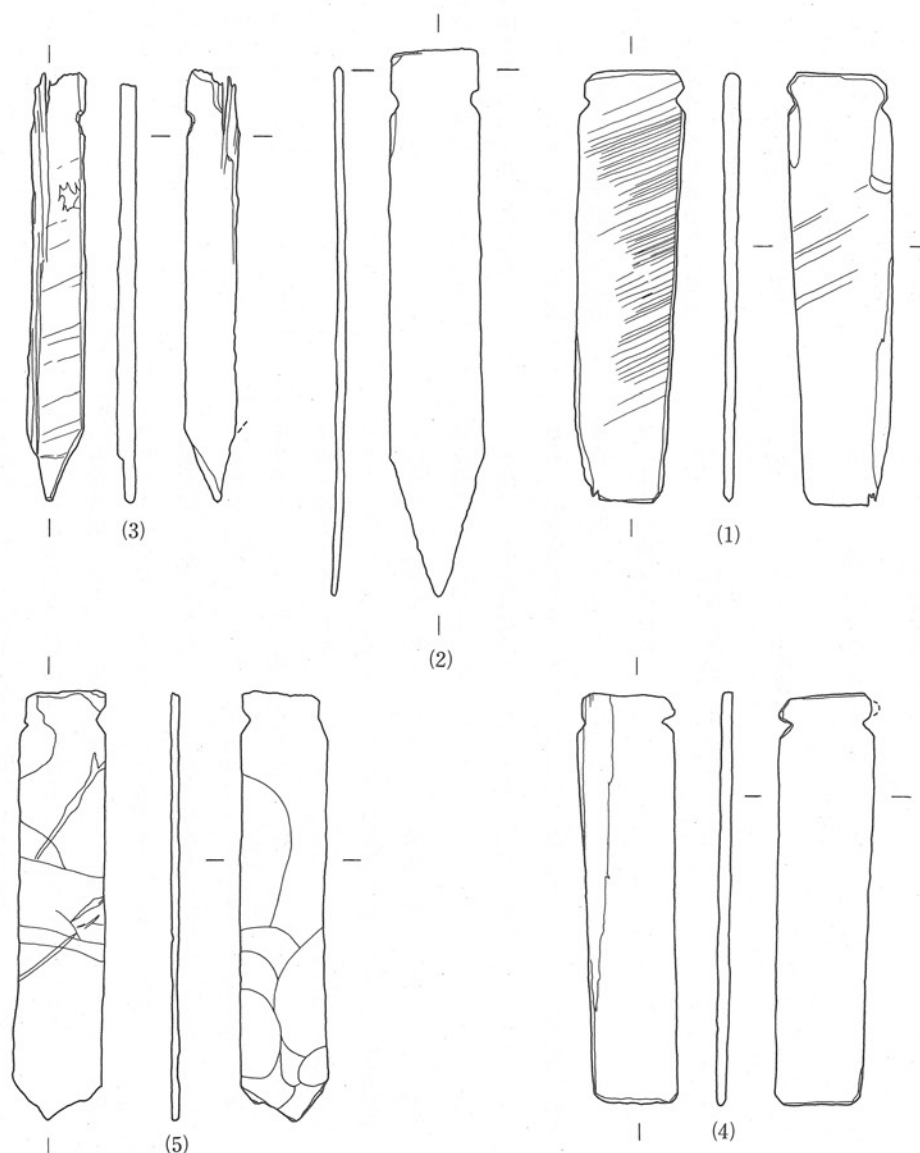
近世木簡の場合、武家や公家が荷物輸送の際に用いた「絵(会)符」や水戸藩領における江戸廻送用の「御城米」に取り付けた「城米札」など、文献によって用途や機能がかなり詳細な部分まで明らかになった事例がある。本遺跡出土の木簡についても、今後、近世文献史料から用途が解明される可能性があるといえる。

木簡の釈文、検討については、島根県古代文化センターの岡宏三、平石充氏のご教示を得た。また、木簡の製作技法については、山中章「考古資料としての古代木簡」(本誌一四号 一九九二年)、水沢教子「屋代遺跡群出土木簡の製作技法と廃棄方法」(『長野県屋代遺跡群出土木簡』長野県埋蔵文化財センター 一九九六年)を参照した。

1996年出土の木簡

番号	成形と調整					下端形状	備考
	上端	下端	左右両側面	表面	裏面		
(1)	キリ・オリの後表裏両面よりケズリ	キリ・オリの後表裏両面よりケズリ	ケズリ	ハギトリ状ケズリ	ハギトリ状ケズリ	]	上下端角欠き
(2)	キリ・オリ	両側面よりのケズリ	—	劣化により不明	劣化により不明	>	
(3)	欠損	表面よりケズリ	—	ハギトリ状ケズリ	ハギトリ状ケズリ	>	裏面下端段差あり
(4)	キリ・オリの後表面よりケズリ	キリ・オリの後表面よりケズリ	ケズリ	劣化により不明	劣化により不明	]	上下端角欠き
(5)	キリ・オリ	キリ・オリの後表面よりケズリ	ケズリ	カットグラス	カットグラス	]	

天神遺跡木簡の製作技法



0 10 cm